

天理教の社会福祉活動の歴史的展開

本連載では、ここまで「社会福祉からみえる現代社会とは何か」という問いへの応答の一つとして、社会福祉は、どのように生まれ、現代社会に至るまで、どのような変化を遂げてきたのかを整理してきた。近代社会への移行と共に成立した社会福祉は、第2次世界大戦後には福祉国家体制の整備がすすめられ、1980年代以降は、新自由主義に基づく見直しがすすめられてきた。本連載のもう一つの問いである「天理教をはじめ宗教における社会福祉活動とは何か」という点との接合を考えるにあたって、今回は、天理教の社会福祉活動の歴史的展開について、金子昭(2004)を参考に概観する。なお、天理教の社会福祉活動の歴史的展開については、布教部社会福祉課に所属する天理教社会福祉研究会が2010年に出版した『陽気ゆさんへの道—天理教社会福祉の百年—』に詳しく整理されている。

第1の時期 (1910年～1945年)

天理教の社会福祉活動は、天理教養徳院(現:天理養徳院)が1910年に設立されたことにはじまる。天理教は、1908年に一派独立を果たすが、その交渉の過程の中で、感化院(非行少年のための施設)の設立が取り上げられ、独立後、中山真之亮初代真柱の意向により、児童の養育施設として天理教養徳院が設立される。この設立の際に、初代真柱が詠んだ「人の子も我が子もおなじこころもて おふしたててよこのみちの人」という和歌は、現在でも天理教の社会福祉活動の根本指針として取り上げられることが多い。その後、天理教養徳院は、社会事業としての側面に加えて、全国の天理教布教師の子弟の養育をおこなう場としても機能し、院内の児童の教育機関として天理尋常小学校(現:天理小学校)の設立につながる。地方においても、東本大教会が、修徳夜学校や六踏園を開設するなど、教会本部を先導に各地で保育園や幼稚園の開設がおこなわれた。また、農業に従事する人たちの子どもを預かる季節託児所が展開されるなど、天理教の社会福祉活動が児童福祉を中心に展開される。この時期の日本の社会福祉は、篤志家や社会事業家による社会事業が主流であり、公的支援が脆弱な時期であった。その中に天理教の社会福祉活動も位置づいていたといえる。

第2の時期 (1945年～1980年代)

第2次世界大戦後、中山正善2代真柱は「復元」を打ち出し、教祖本来の教えに服する活動が展開される。1948年には、諸井慶五郎教務総長が「三大方策」を掲げ、地方においても、教区内で協力し、文化・社会施設を普及させる方針が示された。戦後日本の社会福祉は、日本国憲法により、明確に基本的人権や社会権の保障が示されたものの、国家として社会福祉を整える力がないため、社会福祉法人制度によって民間の力で、福祉国家体制への歩みをすすめていった。こうした機運も合わさって、天理教内では、それまでの児童福祉施設に加えて、生活困窮者や障害者施設など、各種施設の設立や社会福祉活動の展開が広がっていった。

実際に現在、布教部社会福祉課に属する各種連盟も、この時

期に結成される。1951年に天理教社会福祉事業協会(現:天理教社会福祉施設連盟)、1953年に天理教教誨師連盟、1956年に天理教保護司連盟、1959年に天理教民生・児童委員連盟、1982年に天理教里親会(現:天理教里親連盟)といった連盟が設立される。また、天理教内における当事者組織として、1957年に天理教視力障害者布教連盟、1961年に天理教聴力障害者布教連盟、1970年に天理教肢体障害者友の会(現:天理教肢体障害者連盟)が設立されている。

「三大方策」が掲げられた後の1951年、1953年の2代真柱の訓話の中では、天理教における社会福祉関係者に対して、その精神性が示されている(『陽気ゆさんへの道』11～16頁)。そこでは、決して社会福祉事業の運営を目的にせず、布教者としての自覚の上で、社会福祉を提供する側も受ける側も自らの喜びとしての自覚をもって、信仰を目的にすることが強調されている。

金子昭は、第1の時期が「親と子」の理念宣揚期であるのに対して、第2の時期は、「一れつきょうだい」の理念が新たに展開されはじめた時期であると評している。

第3の時期 (1990年代～現在)

金子は、第3の時期は、教会本部や教会・教区単位での活動から、信者一人ひとりが、社会福祉活動へ参加する時期であると指摘する。実際には、1980年より「ひのきしんスクール」が開講され、1992年に天理大学に社会福祉専攻が創設されており、信者それぞれが、布教活動や信仰生活の手段として社会福祉を学ぶ仕組みが整えられている。社会的にみても、阪神淡路大震災を契機として、ボランティア活動が一般化し、NPO法人の設立など新たな社会貢献の形が展開されはじめた時期とも重なっている。

一方で、第1・第2の時期に設立した施設では、設立より年限を重ねる中で、独自性を薄める施設も出てくるようになる。天理養徳院も、2005年に運営を宗教法人から社会福祉法人へと移行するなど、社会的な役割を担ってきたがゆえの変化が求められてきた。これは、天理教のみならず、市民活動の昂揚と共に、従来の社会福祉法人のあり方が見直されたことも影響している。

筆者の見立てでは、第3の時期では、天理教社会福祉活動の組織を整備したからこそ、天理教の社会福祉活動を積極的にこなう層と、そうでない層を固定化した時期でもあると考える。しかし、近年、子ども食堂の活動に取り組む教会が増えるなど、天理教内での社会福祉活動に対する見方の変化と共に多様な実践が芽生えはじめている。そうした意味では、第4の時期に差し掛かっていると見立てることもできるかもしれない。

[参考文献]

金子昭(2004)「天理教社会福祉の展望」天理教社会福祉研究プロジェクト『天理教社会福祉の理論と展開』白馬社、236～256頁。